



A decorative border with a repeating floral and vine motif surrounds the text. The border is composed of stylized leaves and flowers connected by a continuous line.

日本古典集成

太平記

二

山下宏明 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第三八回）

太平記二



定価二二〇〇円

昭和五十五年五月十五日 印刷  
昭和五十五年五月二十日 発行

校注者 山下宏明

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行人 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一  
電話 東京03(二六六)五一一(業務)  
東京03(二六六)五四一一(編集)  
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎  
組版 シーティエス大日本  
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例 ..... 七

卷第九 ..... 三

足利殿御上洛の事 ..... 一五

山崎攻めの事付けたり久我繩手合戦の事 ..... 二〇

足利殿大江山を打ち越えたまふ事 ..... 二六

足利殿篠村に着御すなはち国人馳せ参る事 ..... 二九

高氏願書を篠村の八幡宮に籠めらるる事 ..... 三五

六波羅攻めの事 ..... 三九

主上・上皇御沈落の事 ..... 四〇

越後守仲時以下自害の事 ..... 四六

主上・上皇五宮のために囚はれたまふ事付けたり資名卿出家の事 ..... 四九

千劍破城寄手敗北の事 ..... 五三

卷第十 ..... 五

千寿王殿大藏谷を落ちらるる事 ..... 七

新田義貞謀叛の事付けたり天狗越後勢を催す事	七
三浦大多和合戦意見の事	八
鎌倉合戦の事	九
赤橋相模守自害の事付けたり本間自害の事	九
稲村崎干潟と成る事	一〇
鎌倉兵火の事付けたり長崎父子武勇の事	一〇
大仏貞直ならびに金沢貞将討死の事	一一
信忍自害の事	一一
塩田父子自害の事	一二
塩飽入道自害の事	一八
安東入道自害の事付けたり漢の王陵が事	二〇
龜寿殿信濃へ落さしむる事付けたり左近大夫偽つて奥州へ落つる事	二四
長崎高重最期合戦の事	二三
高時ならびに一門以下東勝寺において自害の事	一六
卷第十一	一三
五大院右衛門宗繁、相模太郎を賺す事	一五
諸将早馬を船上へまゐらせらるる事	一五
書写山行幸の事付けたり新田注進の事	一五

正成兵庫へ参る事付けたり還幸の事	一五七
筑紫合戦の事	一五九
長門の探題降参の事	一六六
越前の牛原地頭自害の事	一六九
越中の守護自害の事付けたり怨霊の事	一七三
金剛山の寄手等誅せらるる事付けたり佐介貞俊が事	一七六

卷第 十二 ..... 一七

公家一統政道の事	一八九
大内裏造営の事付けたり聖廟の御事	一九九
安鎮国家の法の事付けたり諸大将恩賞の事	二二九
千種殿ならびに文観僧正奢侈の事付けたり解脱上人の事	二三三
広有怪鳥を射る事	三三九
神泉苑の事	三三三
兵部卿親王流刑の事付けたり驪姫が事	三四〇

卷第 十三 ..... 三五

龍馬進奏の事	三五五
藤房卿遁世の事	二六五

北山殿謀叛の事	二七
中先代蜂起の事	二六六
兵部卿宮薨御の事付けたり干将莫耶が事	二六八
足利殿東国下向の事付けたり時行滅亡の事	二九七
卷第 十四	三〇五

新田・足利確執奏状の事	三〇七
節度使下向の事	三一九
矢矧・鷲坂・手越河原戦ひの事	三三七
箱根・竹下合戦の事	三三六
官軍箱根を引き退く事	三四五
諸国の朝敵蜂起の事	三五四
将軍御進発、大渡・山崎等合戦の事	三六〇
主上都落ちの事付けたり勅使河原自害の事	三七四
長年掃洛の事付けたり内裏炎上の事	三七七
将軍入洛の事付けたり親光討死の事	三七九
坂本御皇居ならびに御願書の事	三八二

卷第 十五	三八五
-------	-----

園城寺戒壇の事	三三七
奥州勢坂本に着く事	三九四
三井寺合戦ならびに当寺撞鐘の事付けたり依藤太が事	三九六
建武二年正月十六日合戦の事	四〇九
正月二十七日合戦の事	四一九
将軍都落ちの事付けたり某師丸帰京の事	四二七
大樹撰津国豊島河原合戦の事	四三一
主上山門より還幸の事	四三七
賀茂の神主改補の事	四三八

解説	四四五
----	-----

付録	四六四
----	-----

太平記年表	四八六
-------	-----

系図	四九三
----	-----

地図	四九三
----	-----





## 凡 例

一、第一分冊に続いて、この巻には巻第九から巻第十五までを収めた。『太平記』の成立およびその後の変化などについては第一分冊の解説で述べたところであるが、本書の底本には、江戸時代に入り古典刊行の機運が高まる中で刊行された流布本のうち、慶長八年古活字本を用いた。慶長十年古活字本・寛永版本を以って校訂を加え、その部分については頭注にことわった。

一、底本は、漢字・片仮名交じりで、時に漢文表記を交えるが、本書では、これを読みやすくするため、およそ次の方針に従って改めた。

\* 片仮名を平仮名に改め、漢文表記は読みくたす。ただし、文中に引用される漢詩・偈けの類は、作品の効果を考慮して原文の表記を残す。

\* 現代国語における仮名書きの基準に従い、感動詞・代名詞・接統詞・副詞・助詞・助動詞などの多くは、仮名書きに改める。

\* 仮名づかいは、歴史的仮名づかにより統一する。

\* 送り仮名は、原則として新送り仮名の方針に従う。

\* 漢字・仮名の表記は、通行の表記による。なお底本には、あて字が見られるほか、「剋」と「刻」、「責」と「攻」、「甲」と「冑」など、同じ語でありながら表記の不統一がしばしば見られ

るが、つとめて通行の表記に統一する。

\* 読みは、原則として寛永無刊記整版本の振り仮名に従うが、清濁など現代の読みと異なる語、訓読みと音読みの区別を示すべき語、それに人名・地名・年号・官名など、必要に応じて読みを補い、いずれも歴史的仮名づかいによって示す。

\* 音便は、寛永版本に表記のあるものはそれに従い、表記のないものは『平家物語』の語りを参照して適宜判断した。

\* くりかえし符号は、漢字一字をくりかえす場合の「々」を用いるにとどめる。

\* 本文に、適宜、句読点や会話の「」、段落をほどこす。

一、傍注（色刷り）は、本文の読解を助けるため、簡潔に現代語訳を行ったものである。なお、主語や接続詞などは「」で、補足説明は（）でくくって示した。ただし、スペースの都合で、傍注とすべきものを頭注に移した場合もある。

一、頭注では、人名・事項の説明や解釈、本文の校異、傍注の補足、論旨の説明などを行った。また、各章段もしくは段落の内容について、\*印を付して簡単な説明を加えた。なお色刷りで、適宜小見出しをつけた。

一、作品の構成の理解を助けるため、各巻頭に所収年代とその内容を略述した。

一、本巻巻末の解説では、『太平記』の成り立ちに大きな役割を果した落書をとりあげ、その意味を考えた。なお、付録として、年表、系図、地図を収めた。

一、本書の校注を行うにあたり、古くは『参考太平記』『太平記抄』『太平記考証』など江戸時代の注

釈をはじめ、新しくは佐伯常磨・永積安明・後藤丹治・釜田喜三郎・岡見正雄・高橋貞一・市古貞次・大曾根章介・山崎正和・青木晃・長谷川端・増田欣の諸氏の注釈・テキスト・口語訳・研究から学恩を受けた。一々ことわらないが、ここに記して感謝する。

一、貴重な御蔵書の利用をお許しくださった横山重氏（慶長八年・十年両古活字本）および長谷川端氏（寛永版本）にお礼を申し上げる。なお、本文の作成に、今井正之助・長坂成行両氏の協力をえたことを申しそえる。



太平記二



太平記 卷第九



## 卷第九の所収年代と内容

◇正慶二年（元弘三年〔一三三三〕）三月から五月まで。前冊の巻第八とは一部時間的に重なる。

◇船上山での先帝後醍醐の動き、これに呼応して京都に迫る赤松らの動きに対し、北条高時は追討軍として一門の名越らを派遣する。その追討軍の一方の大將をつとめる足利高氏は、高時への私憤から叛意を抱き先帝に志を通ずる。それとも知らぬ名越は、功をあせって赤松と戦い、あつけない討死をとげる。この名越の敗北を機に、高氏は意を決して丹波篠村に討幕の兵を挙げ洛中へと迫る。南方から千種、さらに赤松が東寺を攻め、やがて六波羅は包囲される。追いつめられた探題は一旦関東に下って再起を計ろうと、光厳天皇らを擁して京都を脱出するが、近江路で野伏たちに襲われ、南探題北条時益は討死、天皇も流れ矢に当って負傷する。北探題北条仲時らもまともな合戦をすることなく、番場の宿に総勢四百余名、枕を並べて自害し果て、天皇は捕われの身となる。この六波羅敗退の報が楠正成のたてこもる千劍破に達すると、これを包囲する関東軍は退路を断たれることを恐れ後退する。かくて畿内の大勢は決した。